

それで日本中の学校をさがしまして、宮崎高等農林は生物があるというので、この生物は暗記ものですからどうにかやるだろうということですね。それでようやく受かったんです。

裸の鶏

昭和二十一年に宮崎高等農林に入学したんですけれども、当時の物のない時代に、食物がいっぱいあるわけなんです。豚とか鶏とか。私は鶏の首を切るのがいやだもんですから、首をひねって、もう死んだらうと思って羽をむしっていると、鶏が起き上って裸で逃げ出したりなんてこともありました。

それからだんだん食料が少なくなりまして、我々は飼料を食料にしていたんです。

豚や鶏のエサを馬が食って、馬のエサを人間が食ったりしていましたね。そうしたら動物がやせてきましたね、肋骨のた豚を生まれてはじめて見ました。

そういうことでおなががすいた経験がないんですよ。いい学校にはいったなあと思いましたが。とっても楽しかったですよ。

補導された教師

それからわずかの期間ですけれども、九州学院の高校で生物の教師をやったんです。

です。

昭和二十四年の四月から二十五年の夏までだったんですがね。

私も学校を出てすぐですから、生徒たちとほとんど年の差がなかったわけで、要するに生徒たちの遊び相手だったんですよ。

その頃の先生というのは、戦前から先生をやっている人が多数ですから、先生自身がどういふふうか教えていか迷っておられたと思うんですよ。

私も全く予備知識はないし、教育についての理念もなければ何にもない。

それで私が上通りの下宿に帰ってくる、生徒たちが先に帰ってたむろして、私と生徒たちが先に通って上通りを走り回ったり、所謂「匍匐前進」などの真似事したりして私も一緒に補導されたりしていました。

翌日、校長室で「あなたには、もう一人先生が必要だ」なんていわれましたね。

熊本に帰ると、その時の生徒が「あの時代だからやれたのであって、今なら懲戒免職だ」というんです。

彼らは、なつかしい思い出のように語るけれども、私が教育者であるという立場を放棄していたからで、当時そのような人がいなかったので珍しかったからだろうと思います。

熊本だけのこ会

当時はテレビもありませんし、娯楽とか文化的なおいのするものがあまりなかったんです。それで演劇部をつくったことで、劇を通して人間を描くということに彼らをはじめてくれたんですね。

それがずっと尾をひきまして、私が上京してからも、「熊本だけのこ会」というボランティアサークルで人形劇をやっているんです。児童施設や子供会をまわったり、へき地に行ったり、韓国や沖縄にも行っているようです。

こういうことにつながっていったということは、私にとっても幸運でしたし、私とぶつかったことで何か生まれたというところは、非常にありがたいと思えますね。

それから、私がたまたま演劇関係の仕事をやっていますので、彼らに多少役立てるといふか、サゼッションができるということが、ありがたいし、うれしいですね。

反動

私は、学生時代に染物屋さん下宿していたんですが、この染物屋さんは戦争中に日の丸の旗で大儲けしていましたね。白米に牛肉なんですよ。そしてその親父が言うんです。「今日も銀めしを食った。今日も子供たちに銀めしを食わせられた」と。

これは物のなかった人の、ろくな物しか食わなかった人の実感だと思わなければならない。

ところが、現在はそれが行き過ぎちゃって、とにかく食わせりゃいいというよくな、物質的に豊かにすることが一つの目標になってしまった。そのために子供たちはモヤンっ子になってしまし、物ばかり与える親というのは、子供からばかにされる。

つまり自分が苦勞したから、軍隊や学校で殴られたから、だから子供には苦勞させてはいかん、殴ってはいかん、全部自分のやったことの反対になってしまっているんですよ。

私はこのことは何度も考えるんですけども、今の大人たちの反動というか、自分の教育の正反対の教育をしてしまったことに、今の堪え性のない自殺の問題とか、ちょっととしたことで逆上して人を殺すとかの問題があるような気がしてしやうがないんですよ。

私は俳優ですけれども脚本も書きますし、また最近では俳優教育もやらされているんです。それで二十歳前後の若者と付き合う機会が多いのですが、今の若い連中も「モヤンっ子」ということをよく自覚していますよ。

だから、甘やかすとかえって信用しないんです。冷静さというのが絶対条件ですけれども必要ならば殴ってもいいんじゃないかと思えます。

それからもう一つ問題なのは、柔順すぎるのが気になります。なんかもの凄くおとなしいんです。これは十年位前の学園闘争の反動かもしれせんね。

大事に生きる

それから今の子供は物を大事にしませんね。

昨年、吉野せいさんの「涙をたらしめた神」という作品で九州各地をまわりましたけれども、これは開墾部落にはいつて悪戦苦闘した戦後の物のない時代を描写したものです。これなんか今の子供たちにはピンとこないと思いますね。

物を大事にしないから、精神とか心に非常に大きな影響があるんじゃないかと思えます。物を大事にする、友情を大事にする、命を大事にする、そうして生活の一つ一つを大事にして生きるといふものにつながっているのではないかと。

我が国でも一時期使い捨て時代みたいなものがあって、物というのは使い捨てるもの、大事にするものじゃない、物を大事にする感覚はもう古い、使い捨てるのが新しい道徳であり、美徳なんだという風潮があったと思うんですよ。これは我々が、商業ベースに踊らされたわけなんです、古今東西、いかなる時代においても、物を大事にしないということがいいわけじゃないか、美徳であるはずがないじゃないかと私は思うんですよ。

たてえは水にしても、福岡県など水がなくて困っています、熊本県はこれから百年間位は大丈夫だそうですね。けれどもあり余っているものでも大事に使わなくてはいけないんだということをもっと認識する必要があるのではないでしようか。

人間の要素

私は、以前はあんまり同県人だという区別を感じたことはなかったんですが、またそれがことさらしく先輩だ、後輩だということに何の意味があるんだらうという気持ちがあったわけですね。ところが、最近、ただ利害関係の同県人だということではなしに、やっぱり人間をつくらした土壌というか、同じ土から生えてきたみたいな感じが確かにあるように思えてきたんですよ。

東京と一緒に仕事をするにしても、同県人だということだけではなしに、よその所と違って、ほんのわずかな交流で話を通じるといふか、感じあう部分があるわけですね。

そういうのが郷土性みたいなものではないかと思うし、で郷土性とは何かと考えてみますと、やっぱり山とか海とか川、水それに食物、こういったものが非常に大きな要素だろーうと思えます。もちろん人間はいろいろな要素でできている

わけですけれどもね。

だからそういうものが人間をつくることを考えますと、開発した所に木を植えて緑を回復することなどは、美しさだけではなしに、熊本県人のキャラクターみたいなものにもかかわる問題じゃないかと思えます。

私は人間を描くような仕事をしているので、それから特にそう感じますね。

言葉にしてもそうですよ。確かに東京言葉というか標準語は、機能的です。そして文化的、芸術的な意味においても、地方より東京の方が水準が高いことは認めざるを得ません。だけれども、地方の方言にも何ともいえないニュアンスの言葉があるわけですよ。だから山や川と同じように、語感というか音感的な言葉にも人間をつくる要素があるわけですね。

それで産業との関連もありましょう、経済的に豊かになる必要もありましようけれども、人間をつくるものとしての山や川といった自然、それに言葉をもっと大事にしなければなりませんね。

演劇

演劇の仕事をやりたいという若者が今増えています。私もよく相談を受けまうけれども、やはり一つで非常に価値のある仕事だということ認めます。しかし人間をだめにする要素が多いんで、私

はあまりすすめたくないんです。普通の職業だと、がんばればそれだけの報いがあるわけですよ。もちろん100%とはいきませんが、ところが我々の仕事ですと、報われるパーセンテージが非常に低い。四〇%以下ということはないかもしれないが、かりに六〇%のロスとしたらすごいロスですよ。これは計量できないんですけれども、それで自分だけ一生懸命やったのにどうして報われないんだという落し穴に落ち込んでしまふ。それもまじめにやるの方が先にまいてしまふんですよ。

こういうことを聞いて聞かせても、なおかつやりたいという人には、「期限をきってやってみなさい。俺が三年間みて、これはだめだとわかったら俺のいうことを信用してくれ」と。

それから、熊本の音楽、絵画といったものは、全国的に非常に水準が高いんですよ。それで演劇関係でも、もちろん熊本には優秀な指導者がおられるとは思いますが、そういう方が力をあわせ、また報道機関も協力して、優れた俳優、劇作家が熊本からどんどん出てもらいたいと思えます。私も微力ながらお手伝いできればと念じているんですが……。

こんなことをいうと、演劇関係の人が怒るかもしれないんですが、何かそういうことをなおい層やってもらえば、非常に心強い限りです。